

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小池 登

本論文はピンダロスの祝勝歌における、従来、誤解ないしなおざりにされてきた4つの難読箇所を正確な読解を目的とする。さらにこれまでの議論が錯綜している箇所を題材にして、既存の論点の偏りを具体的にあきらかにする付論がある。

20世紀後半のピンダロス研究は、E. バンディのテーゼ「祝勝歌は祝勝歌自身に語らしめるべし」（これは例えば古注の、詩人の伝記をあらかじめ想定してそれを読み込む解釈を真っ向から否定している）に最大の争点があった。小池氏はバンディ理論の革命性がいまだ徹底されていないと考えているけれども、むしろそれ以前に必要な作業は「大きな総論ではなく網羅的再読であるという立場にたった個別論である」とする。本論文の序論で「祝勝歌は勝利者を讃えるための修辞ないし論述であり、それは一筋の線を辿って論を積み重ねてゆくものであるがゆえに、この論の展開を当該の歌全体に渡って確認すること」の重要性が宣言されたあと、続く各章はその実践となっている。

第1章は『ピューティア第1歌』85-92行の二人称の指示している対象が歌い手自身を指すことを、同じく第2章は『ピューティア第9歌』79行の指示代名詞の対象が勝利者ではないことを、他の祝勝歌からの類例を徹底的に示すことで、従来の読み方が疑わなかった常識の根底をさらに掘り下げていく。『オリュンピア第6歌』82-4行を扱った第3章は、従来、「かく読みたい」とする文章の意味から無理に導き出された一単語の語義（「感覚」）が根拠のないことを暴き、むしろ通常の意味（「名声」）で読みうることを示すとともに、ピンダロスの大胆な比喻といえども正確に論理づけられることを明らかにする。『ピューティア第2歌』67行以下を扱う第4章は祝勝歌結尾部の論理構成を扱う。従来の常識が暗黙裡に歌の構成はかくあるべしとしており、それがまさに祝勝歌というジャンルに従っているこの作品の誤解の原因であった。

本論文は、当時の観衆には自明であっても現代では分かりにくい祝勝歌というジャンルの「約束事」と「論理性」を、祝勝歌全体の類例の収集にもとづいて発掘する。代名詞・語義・結尾部の構成といったような一見小さな事柄を突破口にして、これまでないがしろにされていた読みの排除は単なる思いこみにすぎず、実際には難読箇所もまた当該の歌の筋道に基づき一貫して構成されていることを論証した。個別論の重要性を強調するがあまり本論文全体を支えている意義を積極的に提示しないなどの問題点があるものの、その論考は「大胆な比喻」ないし「詩人をとりまく歴史的状況」といったたぐいの逃げ道を禁欲的に避けて、古代ギリシャ語文献の中で最も難解な表現の論理性をあくまで追究しようとした画期的論文である。よって本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。